Change 2

教育はどうなる?

生きた課題に向き合い、〝学び続ける力〟を身につける

今年度からの新学習指導要領の実施に伴い、高校教育は今、大きな変化の時を迎えています。なぜ変わるのか、日々の授業や活動はどうなるのか、子どもたちの学びや進路にどのような影響があるのか…。そんな保護者の疑問に、教育課程に詳しい二人の専門家にお答えいただきました。

文部科学省 初等中等教育局
学校デジタル化プロジェクト
チームリーダー
(学びの先端技術活用推進室長／
GIGA StuDX推進チームリーダー)
板倉 寛氏

1999年文部省(現・文部科学省)入省。教育課程課係長、島根県教育委員会総務課長、特別支援教育課課長補佐、大臣政務官秘書官、初等中等教育企画課課長補佐、在英国日本国大使館参事官(外務省出向)、教育課程課教育課程企画室長などを経て、現職。

熊本市教育センター
主任指導主事
前田康裕先生

熊本大学教育学部美術科卒業、岐阜大学教育学部大学院教育学研究科修了。国公立小中学校教諭、熊本市教育センター指導主事、熊本市立向山小学校教頭、熊本大学教職大学院准教授を経て、2021年より現職。『まんがで知る 未来への学び 』シリーズ(さくら社)他著書多数。

変化の激しい社会を生きるための資質・能力を問い直す

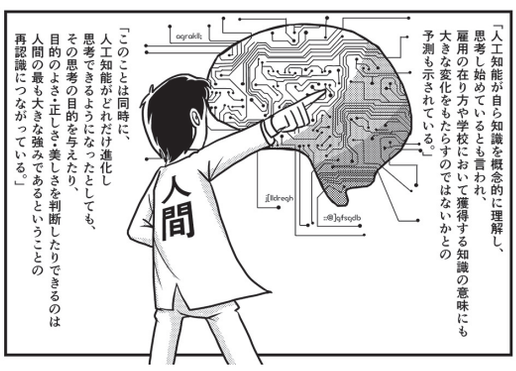
高校教育や大学入試が転換期にあると聞き、「なぜ、わが子が高校生のときに変わるの?」と不満や不安を感じている保護者の方もいらっしゃるかもしれません。なぜ、今、変える必要があるのか。背景には、社会の変化に伴う〝生きるために必要な力〟〝求められる資質・能力〟の変化があります。

「物質的な豊かさを求めていた時代、知識をもっていることに価値があった時代は終わり、目的や解決すべき課題を自ら見出し、得られた知識や情報を目的に応じて分析・活用する力が求められる時代になりました。また、AIなど科学技術が発展するなか、これからはより人間らしい力、つまり、AIがもち得ない創造性や協働性といった資質・能力が求められるようになります。このような社会に適合するにはどのような力が必要かを考え、教育や学びについて改めて考えるタイミングに、今まさにあるのです」(前田先生)

「社会の変化は急速に進んでおり、5年先、10年先がどうなるかは予想できません。かつ、〝人生100年時代〟と言われるように、寿命が延び、人生のステージの捉え方も変化しています。20代前半までは学び、卒業後はひたすら働き、60代で定年…という概念も、既に崩れつつあります。未来は不確実だが人生は長い…という前提に立ったとき、豊かに生きるために必要になるのが、自分をアップデートして成長し続けることです。その原動力となる〝学びに向かう力〟こそがこれからの時代において最も重要な資質・能力の一つであり、これを育むことが学校教育にも求められるようになったのです」(板倉さん)

新しい学習指導要領に描かれた「未来」

「今の子供たちやこれから誕生する子供たちが、成人して社会で活躍する頃には、我が国は厳しい挑戦の時代を迎えていると予想される。生産年齢人口の減少、グローバル化の進展や絶え間ない技術革新等により、社会構造や雇用環境は大きく、また急速に変化しており、予測が困難な時代となっている。」(学習指導要領解説「総則編」より)



『まんがで知る 未来への学び』前田康裕著／さくら社 より(以下同・一部抜粋)

取材・文／笹原風花

新しい高校教育のカギは、「学びに向かう力・人間性等」

個人として豊かに生きるため、そして社会をより良いものにしていくために求められる資質・能力が変化しつつあることを受け、国の教育指針である学習指導要領※用語解説参照が改訂され、高校では今年度より実施されます。改訂の要点について、板倉さんは次のように説明します。

「最大のポイントは、これからの時代に必要な資質・能力を〝三つの柱〟に整理し、具体的に示したことです。また、学習指導要領に示されている内容は、OECDの発信などと重なる部分も多く、社会や経済の方向性ともピントが合っています。教育の方向性と社会や経済の方向性のギャップがなくなってきているというのは、特筆すべきことです」

今回の改訂で明示された「資質・能力の三つの柱」は、生きて働く「知識・技能」、未知の状況にも対応できる「思考力・判断力・表現力等」、そして学んだことを人生や社会に生かそうとする「学びに向かう力・人間性等」です。特に注目したいのが、「学びに向かう力・人間性等」。今後の高校教育のカギとなる要素です。

「〝知識・技能〟、〝思考力・判断力・表現力等〟をどのような方向性で働かせていくかを決定づけるのが、〝学びに向かう力・人間性等〟です。この力が育っていないと、たとえ学生時代には成績が良くても、社会に出てからは自分で考えられない・決められない・行動できない指示待ち人間になり、社会の変化への対応が難しくなってしまいます」（板倉さん）

実社会の課題を探究する生徒が主人公の学びへ

では、高校の教育や学びは、具体的にどのように変わるのでしょうか。新しい学習指導要領には、資質・能力を育むために「どのように学ぶか」についても明示されています。それが、「主体的・対話的で深い学び」です。学習者が能動的（アクティブ）に学ぶという意味から、「アクティブ・ラーニング」とも言われます。

授業はこの視点に基づいて組み立てられ、知識や技能の習得にとどまらず、それを活用する学びが軸となります。授業風景も、黙って先生の話を聞く静的なものから、仲間と活発に意見を交わし合う動的なものへと、保護者の時代からは大きく変わります。

「先生が生徒に知識や技能を教える一方向的な授業から、生徒が自ら目標や課題を設定し、仲間と対話・協働し、自らの学びを振り返りながら深めていく授業へと変わっていく」と前田先生。グループワークなどは手段の一つであり、先生の解説を聞いたり、一人で調べたり考えたり内省した

学習指導要領で示された「育成すべき資質・能力の三つの柱」と「学習の基盤となる資質・能力」

用語解説

【学習指導要領】
全国どこででも一定水準の教育を受けられるよう、文部科学省が定めているカリキュラム編成の基準のこと。およそ10年ごとに改訂される。前文には、「これからの学校には、一人一人の生徒が、自分のよさや可能性を認識するとともに、あらゆる他者を価値ある存在として尊重し、多様な人々と協働しながら様々な社会的変化を乗り越え、豊かな人生を切り拓き、持続可能な社会の創り手となることができるようにすることが求められる」とある。

【OECDの発信】
国際機関であるOECD（経済協力開発機構）では、2030年以降において子どもたちに求められる資質・能力やその育成法を検討する「Education 2030プロジェクト」を進行中。持続可能で幸せな社会を創造するためには、「知識・スキル・態度および価値」を核に「新たな価値を創造する力」「対立やジレンマに折り合いをつける力」「責任ある行動をとる力」といった資質・能力が求められることなどを提示している。

【アクティブ・ラーニング】
学習指導要領では「主体的・対話的で深い学び」とされる。学ぶことに興味・関心をもち、仲間と対話を重ね協働しながら取り組むことで理解を深め、学習活動を振り返って次につなげるという、学習者主体の能動的な学びを意味する。

【探究】
生徒自らが課題を設定し、解決に向けて情報や知識を収集・整理・分析したり、周囲の人と意見を交わしたり協働したりしながら進めていく学習活動のこと。新学習指導要領では探究学習を重視しており、従来の「総合的な学習の時間」が新たに「総合的な探究の時間」となるほか、「古典探究」「理数探究」などの科目も新設される。

りするシーンもあります。さらに、教室の外に出て調査・活動したり、タブレット端末やパソコンなどのデジタルツールを活用したりするシーンも増えます。

さらに、探究的な学びも重視されます。必履修の「総合的な探究の時間」を中心として、「実社会の課題に対して、身につけた知識を活用したり、さらに調べたり、意見を出し合って議論したりしながら解決策を探る、教科等横断的な学びが重要になる」と板倉さん。「ひたすら暗記をしたり問題を解いたりするような勉強のみにとらわれず、実社会で活用できる〝生きて働くもの〟にしていくような知識・技能の習得を意識することが重要です」と話します。知識を覚え技能を身につける基礎学習は今後も必要ですが、「テストのため」ではなく「課題解決のため」という目的があることが大きな違いです。

「何のために学ぶのか、この学びがどう役立つのかが明確になればなるほど、生徒たちの学びに向かう姿勢は主体的になります。そして、こうした主体的・対話的な学びのプロセスを通して、問題発見・解決能力、情報活用能力、言語能力・思考力、他者との協働性や相手を認め思いやる気持ちといった、持続可能な未来社会の創り手となるために必要な資質・能力を育んでいくのです」(前田先生)

成績も入試も、プロセスや姿勢を含む総合的な評価へ

保護者として気になるのが、成績評価や大学受験への対応です。評価については、ペーパーテストの結果や提出物などの成果物だけでなく、「そこにたどり着くプロセスや主体的に学習に取り組む姿勢なども含めて総合的に見取られるようになる」と板倉さん。定期テストの成績さえ良ければ安心…というわけにはいかないのです。

さらに前田先生は、「探究型の学びは大学受験には役立たない、関係ないという考えは、捨てていただきたい」と訴えます。

「近年の大学入試は、総合的・多面的な評価に変わってきており、探究型の学びを通して培われる力がさまざまなかたちで問われます。いわゆる詰め込み型の受験勉強では、対処できません。さらに今後は、さまざまな社会課題に向き合い解決していくこと、持続可能な社会を創造すること自体が職業になります。直接的であれ間接的であれ、今の高校生たちは将来、課題探究活動に関わることになるのです」(前田先生)

保護者自身も学び続け、対話を通して自立を支える

では、高校生の子どもをもつ保護者は、新しい教育をどのように受け止め、わが子をどのように支

【マンガ】

これからの授業はどうなる?

あらすじ

美術教師の桜山さやか先生。作品作りが得意な生徒だけが活躍する従来の美術の授業に疑問を感じ、「ポスターのデザイン」の授業に入る前に、学習指導要領を読み直します。

次ページへつづく

保護者にもオススメ!

『まんがで知る 未来への学び 1〜3』
前田康裕／さくら社

『まんがで知る デジタルの学び』
前田康裕／さくら社

あらすじ

桜山先生は今年度のポスター制作のテーマを「この町のPRをしよう」に決め、準備を進めてきました。まずはポスターのデザインに必要なポイントを生徒に考えさせるため、既存のポスターを知ることから始めます。

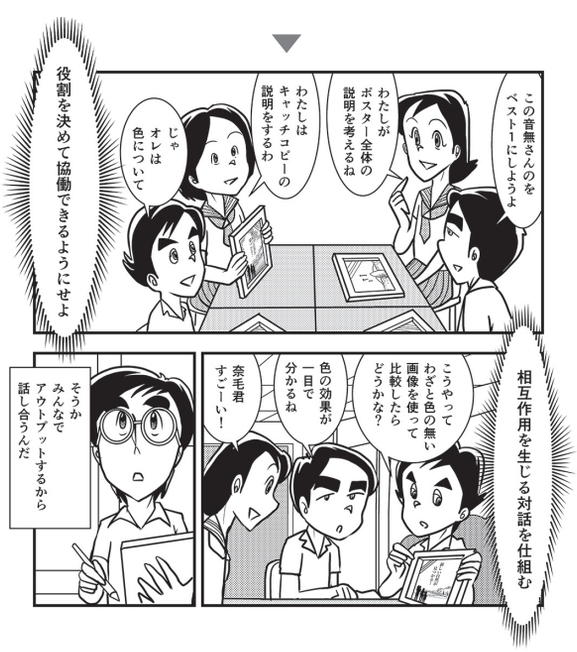
えればよいのでしょうか。

「学力・成績、授業、進路・進学、就職に至るまで、保護者の方々が10～20代だったころとはあり方が大きく異なります。当時一般的だった認識や価値観は多くの場面において通用しないことを、まずは理解していただきたいと思います。そして、消費者的な視点で学校や先生を見るのではなく、わが子を自立に向かわせるという同じ目的をもった当事者同士、共に子どもを支えていこうというスタンスで伴走していただければ何よりです」(板倉さん)

そして、両氏共に強調したのが、保護者自身のあり方です。

「子どもが社会課題に対して当事者意識をもてるかどうか、そこを起点に主体的に学んでいけるかどうかは、保護者の影響も大きいです。保護者自身が社会のさまざまな事象に問題意識をもち、理想に近づくにはどうすればいいかを思考し、親子で対話をすることが大事だと思います」(前田先生)

「学びに向かう力が大事なのは、保護者世代にとっても同じ。保護者自身が人生のどのステージでも学び続け、ときには失敗しながらも、試行錯誤を続けて何度もチャレンジする。そんな姿をぜひ見せてあげてほしいです」(板倉さん)

高校3年間は、子育ての最終ステージ。決定権・主導権を子どもに委ね、自立を促す時期です。

「経験を基にしたアドバイスをするだけではなく、〝対話〟によって子ども自身が気づき、言語化する手助けをしてあげてほしい」と板倉さん。「〝対話〟を通して、子どもが何をどう感じたか、どうしてそう感じたかを引き出し、子どもの良いところを伸ばしてあげてほしい」と前田先生。新しい高校教育でも重視される「対話」は、親子の関係性やわが子の自立を考えるうえでも、カギとなりそうです。